DOI：10.20776/S09127208-38-1-P033
千葉大学法学論集　第38巻第１・２号（2023）

論説

「記憶が残りつづける限り」

——アムステルダムと奴隷貿易・奴隷制——

水島治郎

二〇二二年の公式謝罪

「オランダ国家の名のもと、長年にわたり、人間が交易品として扱われ、搾取され、虐待されてきました。長年にわたり、オランダ政府の権威のもと、最もおぞましい方法で、人間の尊厳が踏みにじられてきました……これらについて、私はオランダ政府を代表し、謝罪を行います」

二〇二二年一二月一九日、オランダ首相マルク・リュテ（ルッテ）は演説を行い、オランダ政府を代表して奴隷制・奴隷貿易に国家の責任があることを認め、謝罪した。二〇二三年七月にオランダにおける奴隷制廃止一五〇年を迎えるに先立ち、政府としての基本姿勢を明示する演説となった。この「奴隷貿易・奴隷制に対する政府の公式謝罪」は国際的にも話題となり、日本でも各メディアの報じるところとなった。

オランダは歴史的に、奴隷貿易・奴隷制との関わりが深い。一七−一八世紀、オランダ西インド会社により奴

隷貿易が大西洋で展開され、約六〇万人の黒人奴隷がアフリカから南北アメリカに移送されたとみられている。劣悪な環境で渡航を強いられた黒人たちの船旅中の死亡率は、一五%に及んだという。そして一七世紀末から一九世紀半ば過ぎまで、植民地スリナムにおいて、大量の奴隷を使役するプランテーション経営が展開され、多くの黒人奴隷が搾取の対象となった。そして他のヨーロッパ諸国が次々奴隷制を廃止する中、オランダの奴隷制廃止は公式には一八六三年、実際には一八七三年にずれ込んだ。「寛容」なイメージの強いオランダであるが、こと奴隷貿易・奴隷制に関していえば、海洋国家としての「利点」を活かし、大西洋をまたいだアフリカ人奴隷の取引に積極的に関与し、そこから多くの収益を上げてきたのである（また本稿の範囲を超えるが、西インド支配とは別に、東インド支配や東インド貿易関連でも、オランダによる奴隷貿易が大規模に展開された）。

特に注目すべきは、オランダの首都、アムステルダムが果たした役割である。奴隷貿易を担った西インド会社にせよ、奴隷制に支えられた植民地スリナム経営にせよ、その中軸となったのはいずれもアムステルダムの有力商人層であり、彼らは市執行部と密接に結びつき、奴隷貿易・奴隷制の維持と発展を図ってきた。オランダにおける奴隷貿易・奴隷制の歴史は、そのほとんどがアムステルダムのそれと重なり合う。そしてアムステルダムに住むスリナムのプランテーション所有者たちは一九世紀半ば、奴隷制廃止が国際的な趨勢となったときにおいてもなお、奴隷制の維持に汲々とし、最後には奴隷解放にかかる補償金を獲得し、「損失」をカバーしたのである。

世界文化遺産に登録された、一七世紀以来のアムステルダムの美しい環状運河地区。そして「黄金の世紀」たる一七世紀に描かれた数々の名画をはじめとする、アムステルダムの豊かな歴史文化。現在も世界中から観光客をひきつけてやまない、このアムステルダムの繁栄の歴史は、実は奴隷貿易・奴隷制と分かちがたく結びついていた。

本稿では、このアムステルダムの歴史の織り成す「影」の部分に注目し、寛容と自由で彩られてきたはずのこの町の過去を、異なる視点から照射することとしたい。

西インド会社の設立

オランダ西インド会社が設立されたのは一六二一年、スペインとの八〇年戦争における休戦期間（一二年）の最終年にあたる。敵国スペイン、ポルトガルの船舶を襲撃する私拿捕を行うとともに、両国が支配する新大陸の砂糖、タバコなどの取引に進出すること、さらに新大陸にプロテスタント（カルヴァン派）の布教を進めることが、設立の動機だった（桜田、二〇一七、一四五）。同社には、当初連邦議会から大西洋貿易の独占権が認められ、条約締結権、官吏任命権、軍隊や軍事基地の保持など、広範な権限が与えられた。まさに「国家の権限を備えた貿易業者」だったのである（Balai, 2013, 54）。

西インド会社におけるアムステルダムの影響力は圧倒的だった。同社には五つの支社が置かれ、アムステルダムの他にゼーラント州（ミデルブルフ）、ロッテルダムなどに置かれていたが、最高意思決定機関である一九人会の構成は、アムステルダムが八名、ゼーラントが四名、その他三支所が二名ずつ、連邦議会指名が一名となっており、アムステルダムが半数近くの理事を占めていた。さらに一九人会の議長職は、アムステルダムが六年担当するとゼーラントが二年担当し、以後その繰り返しとされており、アムステルダムの優位性は明らかだった。そしてアムステルダム選出の理事は、有力なアムステルダム商人一族が代々独占し、血縁や友人つながりを通じ、排他的なネットワークを形成する。

なお宗教色の薄い東インド会社と異なり、西インド会社は厳格なカルヴァン派系の色が強かったが、これはア

ントウェルペンをはじめとする南部ネーデルラント諸州出身者―スペインの迫害を逃れてオランダにたどり着いた人々においては、宗教的に厳格な立場に立つ人が多かった―が、同社において主要な役割を果たしていたことによる。

当初、奴隷貿易は西インド会社の主たる業務ではなかった。そもそも西インド会社設立を提案した生みの親、アントウェルペン出身の商人であるウィレム・ウッセリンクスは、奴隷制に否定的な立場だった（Balai, 2013, 53–54）。彼は新大陸の産品のもたらす巨大な富に目をつけ、それと併せてカルヴァン派の布教を進めることを説き、西インド会社設立を主導したものの、奴隷に強制労働を強いるよりは、自由人の労働者が働く方がはるかに成果は大きい、と考えていたのである。

奴隷貿易の開始と発展

しかし設立後しばらくして、西インド会社はその舵を奴隷貿易へと大きく切っていく。

もともと大西洋における奴隷貿易を先行して進めていたのはポルトガルである。すでにポルトガルは一五世紀より、マデイラ諸島におけるサトウキビ・プランテーションの開発を進め、その労働力としてアフリカ出身者を多数奴隷として運び、使役していた。また首都リスボンにも奴隷が多数流入しており、一六世紀前半の時点でリスボンには、西アフリカ、アメリカ、インド、さらに中国出身の奴隷がおり、「多民族雑居」状況が出現していたという（デ・ソウザ・岡、二〇二二、一四四–一五四）。

マデイラ産の砂糖の流通を主に担ったのは、ポルトガルを拠点とする改宗ユダヤ人商人である。北イタリアから南部ネーデルラントに広がる彼らのネットワークを通じ、マデイラ産の砂糖はヨーロッパ各地で広く需要され

た。そして一六世紀にはポルトガルの支配下、ブラジルで大規模なサトウキビ・プランテーションが開発されると、やはり西アフリカ出身の奴隷が多数送られる。そしてこのポルトガルの改宗ユダヤ人商人を軸とするネットワークを介し、スペイン領を含め南北アメリカにアフリカ人奴隷が広く供給されていく。中米における金銀鉱山、南米の沿岸部における船員や港湾労働、都市の家庭における女中や乳母なども含め、奴隷はアメリカ大陸経済の重要な要素となっていった。

しかし、一六世紀に確立したかに見える、ポルトガルおよびスペインの大西洋貿易の優位に対し、世紀末以降、新たな挑戦者として現れたのがオランダである。オランダは、特にアムステルダムにポルトガルの改宗ユダヤ人商人を引きつけつつ、スペイン・ポルトガル（両国は一五八〇年に併合した）の築いたグローバルな貿易ネットワークを活用する形で国際商業に参入し、南北アメリカとの貿易を急拡大させた。とりわけブラジル産砂糖のヨーロッパにおける中継基地として、オランダは発展をとげた（安村、二〇二一、五五–五六）。特に一六〇九年から一六二一年は、オランダとスペインが休戦期間にあったことから、多くの改宗ユダヤ人商人がイベリア半島を離れ、オランダ、とりわけアムステルダムに渡っている。

しかし一六二一年、休戦期間が終了し、スペインが通商禁止措置を発動すると、アムステルダムの砂糖貿易は強い打撃を受ける。この情勢変化を背景に、設立まもない西インド会社は一六二〇年代、世界最大の砂糖生産を誇るポルトガル領ブラジルの攻略に乗り出す（関、二〇二一、一九三–一九四）。一六三〇年にペルナンブコ州のレシフェを占領するなど支配地域を拡大し、オランダ領ブラジルを成立させた。

しかしブラジルの砂糖プランテーションは、基本的にポルトガルによって西アフリカから毎年移入される、多数の黒人奴隷の労働力を前提にしていた。一六〇一年から二五年にかけて、約一〇万人の奴隷が移入されていた

とみられる。そのため、新たな支配者であるオランダ西インド会社は、ただちに奴隷労働力の不足という事態に直面した。

ここに西インド会社は、ブラジルの奴隷労働力の確保のため、自ら奴隷貿易に積極的に参入した。また、それと併せて西アフリカから安定的な奴隷供給を確保するため、黄金海岸における奴隷貿易のポルトガル拠点を制圧し、わが物とする（同地はエルミナと改名された）。なおオランダ領ブラジル総督として、植民地経営の拡大、西アフリカにおける奴隷供給拠点の確保などの指揮を執ったのが、世界的に有名なハーグの美術館、マウリッツハウスで知られる、ナッサウ・ジーゲン伯のヨハン・マウリッツだった（桜田、二〇一七、一四六－一四七）。こうして奴隷貿易のルートが確立し、一六三六－四五年の一〇年間で、西アフリカからブラジルに西インド会社が輸送した黒人奴隷の数は、二三、一六三人に上った。

西アフリカのエルミナ統治において西インド会社は、現地の有力者層を手なずけ、軍事面を含む「友好関係」を築きつつ、支配の安定化を図った（den Heijer, 2015）。特にイギリスやフランスなど他のヨーロッパ諸国と対抗するためにも、このことは重要な意味を持っていた。一七世紀、オランダはイギリスと幾度も戦火を交えていたが、その対決は西アフリカにおいても展開された。特に第二次英蘭戦争の際、エルミナ近辺のオランダの軍事拠点はロバート・ホームズ率いるイギリス海軍に制圧されており、それを一六六五年に再奪取したのが、いまもオランダで国民的な人気を誇る海軍提督、ミヒール・デ・ロイテルだった。デ・ロイテルの率いるオランダ軍にはエルミナの現地勢力も加勢し、イギリス軍の撃破に協力している（一七世紀後半のオランダの軍事面の展開については、van Alphen et al.（2021）を参照）。

ただ、その時点でブラジルにおけるオランダ支配は過去のものとなっていた。ポルトガル人植民者らはオラン

ダに頑強に抵抗し、すでに一六五四年、オランダ最後の拠点のレシフェが陥落していたのである。オランダの早期の敗北の要因として、軍事的に弱体だったというよりは、オランダ側の多様なアクターにおけるブラジル植民地経営をめぐる不一致、組織的混乱が背景にあると指摘する研究もある（Antunes, Odegard and van den Tol, 2015, 90–91）。

なおレシフェにはオランダ支配下、アムステルダムからユダヤ人が多数入植し、四〇〇–六〇〇人規模の有力なユダヤ人共同体を形成して砂糖貿易や奴隷貿易に従事した。しかしポルトガルの侵攻により、共同体は瓦解した。その後ユダヤ人の一部は北アメリカに移ってニューアムステルダムに定住し、北米最初のユダヤ人共同体を建設している（関、二〇二一、一九四）。

ブラジル植民地は失ったものの、このブラジルへの奴隷輸送を通じ、オランダが西アフリカに拠点を確保し、かつ奴隷貿易のノウハウを身につけたことは大きかった。以後西インド会社による奴隷貿易の活動範囲は広がり、一時オランダ領だった北米東海岸、オランダ領スリナム、そして中南米に広がるスペイン領などへの奴隷供給も進められていったのである。

西インド会社が奴隷貿易を軸に大西洋で展開したのが、いわゆる三角貿易である。オランダから出発する船は、アムステルダムで様々な商品を積み込み、それらを西アフリカ現地の商人に引き渡し、対価として黒人奴隷を受け取る。そのさい西アフリカに輸出されたものとしては、織物、武器、火薬、ナイフ、腕輪、酒、日用品、タカラガイなどがある。現地商人の多様な需要にこたえるため、西インド会社の船は一〇〇–一五〇品目もの品を取り揃えてアフリカに向かったという（Balai, 2013, 88）。なお織物やタカラガイは、オランダ東インド会社が調達してきた品を、西インド会社が購入してアフリカに運ぶかたちをとったが、特にタカラガイは西アフリカにおけ

る貨幣としての役割を果たしていたことから、フランスやポルトガルの奴隷商人たちもタカラガイを求めてアムステルダムを訪れ、その結果、アムステルダムはタカラガイ取引の中心地ともなった。

次に船は黒人奴隷を、カリブ海のオランダ領キュラソー（西インド会社の中継拠点が置かれた島）やスリナムなどに運ぶ。そして最後に、新大陸の産品である砂糖やコーヒーなどを積み込み、オランダに帰還した。

西インド会社の奴隷貿易が活発化したことは、アムステルダムにおける関連産業の隆盛にも一役買った。貿易船の建造、新大陸の産品の販売もアムステルダムが舞台となった。輸出品の取りそろえ、ローソクなどの船内必需品や燻製肉など食料の調達も市内で行われた。奴隷貿易と直接関係ないように見えるアムステルダムの地元産業もまた、その恩恵を確かに受けていたのである。

なお西インド会社による奴隷貿易の独占は一七三〇年代に終わりを告げ、それ以降の奴隷貿易は、ゼーラント州などの自由商人の活動に移行した。西インド会社はこの頃、奴隷供給の義務が重荷となり、奴隷貿易で収益を得られなかったことから、活動の力点を金や象牙取引に移す方針を決めていたのである。一七三九年、西インド会社の独占体制下で最後となる奴隷船「若きダニエル」が、五〇〇名の奴隷を載せてエルミナを出港したが、目的地で降ろされた奴隷の数は四一六名に過ぎず、八四名の奴隷は船旅の途中で死亡した。最後まで黒人の命を軽んじた、西インド会社による「奴隷貿易の独占」だった（Balai, 2013, 70–73）。

スリナムのプランテーション経営と奴隷制

アムステルダムが奴隷貿易と並んで深く関わったのが、植民地スリナムのプランテーションを支える奴隷制だった。多くのアムステルダムの有力商人層が、自らプランテーション所有者として、あるいは投資家として、

奴隷制を維持し、またそこから収益を上げた。
オランダが新大陸で確保した植民地は、最終的に南アメリカ大陸では（現在の）スリナムの他、カリブ海地域ではキュラソーなどいくつかの島にとどまった。しかし奴隷を用いたプランテーションが広範に開発されたのはスリナムのみだった。そしてアムステルダムはこのスリナムの奴隷制と二世紀にわたり密接に関わり、支えることになる。なおキュラソーは、土壌が農作物の大規模栽培に適さず、その代わり一八世紀初頭まで奴隷貿易、一八世紀からは多様な産品を扱うコスモポリタンな自由貿易地として栄えた（Oostindie, 2015, 248–251）。
第二次英蘭戦争の結果として結ばれたブレダ条約（一六六七年）で、オランダはイギリスからスリナムの領有権を得た。ただこのスリナムの扱いについては、当初管轄していたゼーラント州がアムステルダム側に買い取りを持ち掛け、最終的にアムステルダムに本拠を置く「スリナム協会」が新たに一六八三年に設立され、統治にあたる、という紆余曲折があった。こうして新設されたスリナム協会は、西インド会社、アムステルダム市当局、そして有力商人のファン・ソメルデイク家がそれぞれ三分の一ずつ所有し、取締役もこの三者がそれぞれ出す形で運営した民間企業だったが、一六八六年の連邦議会決議により、スリナムの統治権はこのスリナム協会に託された。スリナム協会を通じ、アムステルダムのスリナム統治への影響力は決定的となり、スリナムは「アムステルダムの植民地」となった（Balai, 2021, 88）。スリナム協会のもと、同地におけるプランテーションの数は大幅に増加し、特にコーヒーとサトウキビの栽培が大規模に進められた（スリナム協会は一七九五年に解散するまで存続）。スリナム協会は、抵抗する黒人奴隷を厳罰に処し、植民地統治の徹底を図った。
この植民地経営、奴隷プランテーション経営を考えるとき、アムステルダムの金融セクターが植民地の奴隷制の発展に果たした役割も重要である。代表格の一つとして、ドゥーツ基金（Fonds W.G. Deutz）が挙げられる。

この投資基金を設立したのはウィレム・ヒデオン・ドゥーツ（一六九七―一七五七）であり、彼の兄弟のジャン・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフトが（後述する）ヘーレン運河五〇二番地の住人だった。

ウィレム・ヒデオン・ドゥーツはアムステルダム市長を五回にわたり務め、銀行家としても積極的に活動した、文字通りのアムステルダムの政治経済エリートであった。彼のもとで一七五〇年代に設立されたドゥーツ基金は、当時拡大しつつあった、奴隷を用いたスリナムのプランテーション農園に資金を貸し付け、利益を上げた。スリナムでは、一七四〇年の時点でプランテーションの数が四〇〇に達し、その数はさらに増えており、農園主に旺盛な資金需要があったのである。貸し付けの際、担保となったのは農園のほか、家畜、そして奴隷だった。そしてドゥーツ投資基金は、農園主に貸し付ける資金を調達するため、年利五―六%の魅力的な金利で資金を集めており、アムステルダム市当局自体もこの基金に投資を行っていた。設立から一世紀余りを経た一八六三年、スリナムで奴隷制が廃止された時点においても、この基金にはアムステルダム商工会議所会頭、州議会議員や下院議員など、アムステルダムを代表する名だたる人士が多数資金を投資していた。また、ドゥーツ基金が所有者として経営するプランテーションの奴隷の総数は、八六八人にのぼっている。

具体的な奴隷農園の状況を見てみよう。スリナムの有力農園として知られる「休息と労働（Rust en Werk）」なるコーヒー農園は、軍人でありスリナム統治に中核的に関わったウィフボルト・クロメリンにより、一七四九年に設立された。一七七四年の時点で、合計二〇七名の奴隷がいたことが記録されている。栽培されていたコーヒーの木は九万三七九本であり、文字通りの大規模農場だった。奴隷名簿において、全奴隷が成人男性・成人女性・少年・少女の四つのカテゴリーに分けて記録されているが、成人男性六五名、成人女性七六名とあり、この農園は女性の比率が相対的に高いことがわかる。女性奴隷は仕事内容に鑑みてコーヒー栽培向きである、と判断

された結果かもしれない。彼らは本来の名前を奪われ、奴隷主により名前が割り振られた。「イサーク」「ウィレム」「クララ」「ウィルヘルミナ」といったオランダ人風の名前から、「水曜日」「四月」といった曜日や月の名前を付けたものまであるが、基本的に同じ名前がないのは、奴隷個人の識別を重視して命名がなされた結果であろう。一人一人につき、資産価値が算定された。何らかの技術を習得している奴隷の価値は高く算定され、「無役」とされた奴隷の価値はゼロとされていることがわかる。

ふだん奴隷たちは、幅七メートル、奥行き八六メートルの長細い巨大な住まいに押し込まれた。この宿舎の部屋数は二八だったことから、通路の面積を勘案すると、平均で6×三メートルの小部屋に七名が住まわされていた勘定になる。一人当たりの面積は二～三平方メートルに過ぎなかった。

アムステルダム市内の黒人

それでは、当時のアムステルダム市内に黒人はいたのだろうか。一六世紀末には、アムステルダムにおける黒人の存在が記録に現れているが、一七世紀前半になると、スペイン・ポルトガルを離れ、アムステルダムに移住したユダヤ人商人に同行した黒人使用人を中心に、市内東部のユダヤ人の多い地区に住む黒人の姿が目立つようになる（もともとスペイン・ポルトガルでは、黒人の使用人を用いる家が多かった）。なかでもユダヤ人の多いブレー通り周辺が、黒人などの異民族が多い界隈として知られた。

このブレー通りに居を構えていたのが、オランダを代表する画家、レンブラントだった。彼の絵には、合計で黒人の男女二〇人が描かれている（Lucassen, 2021, 139）。彼が自宅の近くで実際に見た、市井の人々の様子が、その絵の人物たちに反映されている可能性が高い（絵画や芸術作品などにみられるオランダの黒人イメージを歴史的

に分析した興味深い研究として、Blakely（2001）も参照)。

他の多くのヨーロッパの都市と同様、アムステルダムは奴隷制を認めていなかった。そのため、黒人が自由人として市内に住むことは可能だった。実際には、使用人として主人に束縛された状態にある黒人も多かったが、他方、使用人の身分を離れた黒人らが一七世紀、少数ながら市内で黒人コミュニティを形成していた形跡がある。また、植民地出身の黒人奴隷がアムステルダムに長期滞在し、結果的に自由人として認められた例もある（「半年の居住」が自由人とされる目安とされた)。しかし自由人になったとしても、それは何ら生活を保証するものではなく、貧困にあえぎ、物乞いや売春婦として糊口をしのぐ黒人もいた（Lucassen, 2021, 135–144)。

ヘーレン運河五〇二番地

さてアムステルダムと奴隷貿易の関係について、特定の建築物に注目して独自の光を当てた興味深い研究がある。歴史家レオ・バライの刊行した『ヘーレン運河五〇二番地　―奴隷貿易、暴力、支配欲　一六七二―一九二七年』（Balai, 2021）である。研究対象はヘーレン運河五〇二番地の豪邸。同書でバライは、アムステルダムの中心部、一七世紀オランダの繁栄を今に伝える美しい運河地区の家を舞台に展開された、奴隷貿易と搾取の歴史を見事に描き出している。以下の同宅に関する叙述も、基本的にバライの研究に負う。

この五〇二番地の邸宅は、一六七二年に建設され、一九二七年にアムステルダム市に所有権が移るまで、ほぼ一貫して奴隷貿易や植民地搾取に関わる有力者や関係者が居住してきた。

最初に住んだのが、奴隷貿易に主導的な立場から深くかかわったパウルス・ホーディン。そして一八〇四年まで、奴隷貿易に直接間接に関係のある、彼の子孫が所有してきた。それ以降も一九二七年まで、東インド貿易な

どを含め、植民地支配と密接にかかわる人物がここを拠点として居住し、経済活動に従事してきた。一九二七年以降、同宅はアムステルダム市長の公邸として利用されており、オランダ史に名を残す著名な市長たちが居住してきた。ヘーレン運河五〇二番地は、近代アムステルダムの光と影を示す象徴的な場所なのである。

このヘーレン運河五〇二番地の歴史は、一六六五年、アムステルダムの有力商人エフェラルト・スコットがその土地を（周辺の土地と併せ）一六八二〇ギルダーで購入し、六年後の一六七一年、縁戚のパウルス・ホーディンに同地を売却したことに始まる。そしてここにパウルス・ホーディンが翌一六七二年、現在まで続く豪邸を建築し、自宅を構えたのである。付近には、国際貿易に従事する有力商人たちが多数住んでおり、まさに当時のアムステルダムの経済的中心であったが、その商人たちの多くは、同時に奴隷貿易に深く手を染めていた。

このスコット家とホーディン家は、ともにアントウェルペンなど南部ネーデルラント出身でアムステルダムに移ってきた商人一族という共通点があり、いずれも西インド会社などに関わって奴隷貿易に密接に関与することになる。ホーディン家がアムステルダムに拠点を構えたのは、サムエルとダニエルの兄弟が同地に移ってきた一六〇四年のことであり、そのダニエルの息子がパウルス・ホーディンである（なおサムエルの方は、北アメリカのニュー・ネーデルラント植民地開発に積極的に関わり、その子孫はスリナムの植民地経営に携わっている）。パウルス・ホーディンはこのヘーレン運河五〇二番地にあって、羊毛取引や金融業に従事するかたわら、西インド会社やスリナム協会の理事として奴隷貿易の推進に積極的な役割を果たした。特に彼が深く関わったのが、スペイン植民地への奴隷輸出である。

もともとアメリカ大陸のスペイン植民地では、農園や鉱山労働に従事させてきたインディオの労働力の供給が、インディオの大幅な人口の減少により困難となり、アフリカからの黒人奴隷の輸入に頼る状況が生じていた。し

かしトルデシリャス条約に基づきアフリカがポルトガルの勢力圏とされたことで、アフリカに拠点を持つことのできないスペインは、民間業者とアシエントとよばれる奴隷供給契約を締結し、自らは手を汚さずに植民地への奴隷の移入を進める方式をとった。このアシエントには、直接間接に各国の奴隷商人たちが群がり、巨額の利益を業者にもたらした。

ただオランダは、八〇年戦争を戦ったスペインと対立関係にあったことから、当初西インド会社は、アシエント業者の下請けの形で契約を結び、アフリカから運んだ黒人をスペイン領に引き渡す形をとった。一六五八年から一七二九年までの六〇年余りの期間、西インド会社が下請け業者としてスペイン側に送った黒人の数は、九六、七〇八人にのぼる。そのうち約七万人は、西インド会社の拠点の一つであるキュラソーを経由してスペイン領に送られた（Balai, 2013, 31）。

アシエント業者と西インド会社が締結した下請けの奴隷供給契約には、契約に携わった西インド会社の責任者の名前が明記されているが、パウルス・ホーディンは他の理事たちとともに、しばしば登場している。

彼の名前が入った一六八三年の奴隷供給契約によると、その契約書では、向こう六年間にわたり毎年三、〇〇〇人、合計で一八、〇〇〇人の黒人奴隷を西インド会社がスペイン側業者に引き渡すとされている。引き渡される黒人については、まるで通常の物品と同じように「インドの物品」と表記されている。なお一五歳から三五歳までの健康な男女が一人一件の「物品」として計算され、年齢が下がるにしたがって「価値」が下がることが記されていた。

アムステルダムの「華麗なる」一族

一六九〇年、すでに妻や二人の子どもに先立たれていたパウルス・ホーディンは、残された娘カタリーナの結婚相手として、最適な人物を選び出した。その人物は、西インド会社やスリナム協会の理事仲間であり、やはり富裕な商人として有名なコルネリス・ボルス・ファン・ワーフェレンである。二人の結婚式は四月に執り行われたが、そのわずか半年後の同年一〇月、パウルス・ホーディンが死んでいる。アムステルダムの奴隷貿易で中核的な役割を果たしたパウルス・ホーディンは、娘と巨額の財産、そして邸宅を託す相手を見つけ、結婚を見届けるかのように世を去ったといえる。そして新婚夫婦はそのまま、ヘーレン運河五〇二番地の邸宅に住み続けた。

結婚相手のボルス・ファン・ワーフェレン家もまた、西インド会社や東インド会社の経営に深く関与し、奴隷貿易の一端を担ってきた。まさにアムステルダムの奴隷貿易は、アムステルダムの政治エリート、経済界の有力者たちが代々にわたって手を染め、巨額の利益を上げ、結婚を通じて相互に絡み合う緊密なネットワークを築いていた。なおコルネリス・ボルス・ファン・ワーフェレンは、一七一二年に妻カタリーナが死んだ後、東インド生まれのヨアンナ・マリア・ファン・リーベックという女性と再婚したが、彼女の祖父ヤン・ファン・リーベックは南アフリカ、ケープタウン基地の建設指導者として歴史に名を残した人物である。

さてコルネリス・ボルス・ファン・ワーフェレンとカタリーナとの間には二人の娘が生まれ、成人した。その一人であるコルネリア・マリアは一七一八年、やはりアムステルダムの名家出身、ジャン・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフトと結婚し、ヘーレン運河五〇二番地に住み続ける。ジャン・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフト自身はヘーレン運河五〇二番地の「伝統」と異なり、奴隷貿易などに関わっていなかったようだが、兄弟の

ウィレム・ヒデオン・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフトは、すでに述べたようにドゥーツ基金によりスリナムのプランテーション経営者に資金供給を積極的に行うなど、奴隷制と深く関わった人物だった。また、ドゥーツ・ファン・アッセンデルフト家と深い関係にあるコイマンス家も、やはり奴隷貿易に継続的に関わっていた。

ジャン・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフトとコルネリア・マリアの間には、二人の息子が生まれた。その一人、コルネリス・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフトは、一七五六年、従姉妹のマリア・ドゥーツと結婚する。このマリア・ドゥーツの母方の祖父はフェルディナント・ファン・コレンといい、やはり西インド会社の理事を務め、しかもアムステルダム市長に四回にわたり選ばれた人物だった。

一七七二年、初めて一族以外の者にヘーレン運河五〇二番地の邸宅は貸し出され、その状態がほぼ二〇年続く。そして一七九三年、コルネリスとマリアの息子であるアンドリース・ドゥーツ・ファン・アッセンデルフトがヘーレン運河五〇二番地に移り住み、この家における一族の歴史が復活する。アンドリースが結婚したヤコバ・マルハレータ・ボレールもまた、父や母方の祖父が奴隷貿易に関与していた。アンドリースは一八一四年、貴族（准男爵）に叙せられ、下院議員やアムステルダム市長を務めるなど、アムステルダムを代表する政財界人として活躍した。

そして一八〇四年、ヘーレン運河五〇二番地の邸宅は、一族外の者に売却された。これにより、建設から一世紀余りを経て、このパウルス・ホーディンとその子孫たちとの縁が切れる。

しかしこの邸宅と奴隷貿易、奴隷制との深い関わりは、これ以後も続いた。

「地上に何ものをも持たず」

新たに所有者となったのはテオドール・ヒュルヒャー。彼自身はまもなく死亡し、その息子で同名のテオドール・ヒュルヒャーが、コンスタンティア・ヘルハルディア・ノーベルという女性と結婚する。実は彼女は、スリナムに広大な奴隷プランテーションを所有するノーベル一族の出身だった。その結果、テオドール・ヒュルヒャーは一八〇八年、相続によってノーベル家のプランテーションをわが物とする。こうして彼は今や、スリナムでも有力プランテーションとして知られる、先述の「休息と労働」の所有者となったのである。

一九世紀、この「休息と労働」は、スリナムの代表的な綿花プランテーションとして繁栄する。プランテーション経営の指揮を執ったのは、テオドール・ヒュルヒャーから農園を受け継いだ長男、ピーテル・コンスティン・ヒュルヒャーである。ここで興味深いことは、彼が農園経営と併せ、スリナムの黒人奴隷を対象とした宗教的な教化にも積極的に関与したことである。具体的には、プロテスタントのモラビア兄弟団の宣教師を受け入れ、その布教活動を支援したのである。

その布教活動支援の背景にあったのが、当時進められていた、スリナムの奴隷教化の動きである。一八二〇年代末、「スリナムの奴隷住民における宗教教育の促進協会」が設立され、オランダとスリナムで活動を開始する。同協会の指導者で、後にオランダ首相を務めるヘリット・スヒメルペニンクは、モラビア兄弟団の活動をスリナムに移入する意義について、「彼ら［奴隷］が運命を安んじて受け入れるようにし、とりわけ自らの義務について正しい知識を身に着けるようにすること」と明言している。それにより、「地上に何ものをも持たず、自らの人生に何の見通しもない、哀れな黒人たち」が祝福へと導かれる、というのである。

一九世紀に入り、奴隷貿易、ついで奴隷制度の廃止の動きが各国で進む中、スリナムではこのように、奴隷に一方的な服従と運命の甘受を求め、奴隷制度の維持に宗教を活用しようという逆の動きが生じていた。そして奴隷プランテーションの代表格「休息と労働」を経営するピーテル・コンステイン・ヒュルヒャーは、自ら宣教師たちに施設や教会を提供し、所有する農園の秩序維持を図りつつ、広くスリナムの黒人奴隷に対する教化を進めようとしたといえるだろう。

そしてピーテル・コンステイン・ヒュルヒャーの果たした歴史的役割は、スリナムにおけるプランテーション経営や教化支援にとどまるものではなかった。彼は北ホラント州の州議会議員を務めるなど、政治的にも活発な人物だったが、その彼の活動で特筆すべきは、オランダにおける奴隷制廃止を全力で阻止しようとしたことであろう。

奴隷制廃止問題

オランダでは一八一四年、イギリスの圧力の下で奴隷貿易が廃止されていたが、奴隷制そのものの廃止には長い時間がかかった（奴隷貿易と奴隷制廃止については、大西（二〇一一）も参照）。しかし一九世紀も半ばになると、オランダでもようやく奴隷制廃止に向けた機運が高まる。特にフランスが一八四八年に奴隷制を廃止し、スリナム植民地に隣接する仏領ギアナで奴隷解放が実現したことのインパクトは大きかった[1]。オランダ政府も、奴隷制の見直しに重い腰を上げた。

そこに立ちはだかったのが、プランテーション経営者たちをはじめとするアムステルダムのエリート層である。その代表格の一人が、ピーテル・コンステイン・ヒュルヒャーだった。彼らは奴隷制廃止の動きに警戒心をあら

わにし、一八四八年、時のレイク植民地相に書簡を送付し、奴隷制の維持を訴えた。

同書簡において、彼らは次のように主張した。奴隷制はそもそも世界各地において、昔から存在しており、社会の中で合法的に確立してきた制度である。このような既存の確立された社会制度、法制度に従うことは、キリスト教的原則からも正当化される。奴隷制の歴史は、スリナムの奴隷制よりはるかに古い。それゆえ、近年の奴隷廃止論者のいう、奴隷制を「自然に反する」もの、人権に真っ向から背くものとする主張には、根拠がない。奴隷の保持は「奴隷所有者の権利」であり、奴隷解放が実現しても、その権利が奪われることがあってはならない。そもそも奴隷貿易や奴隷制度は、一七世紀末以降、西インド会社がオランダ政府より毎年の奴隷供給の責任を託されてきたように、国家を挙げた保護と促進のもとで進められてきた。植民者たちが新世界の厳しい条件の中で開拓を進めてきたのも、まさにこの国家事業の下で、奴隷所有が認められたことが前提となっており、今になってその奴隷所有を否認しようとするのは許されない。

このように奴隷所有者たちは、あの手この手の論理を用い、奴隷廃止論を全面的に批判した。しかし国際的な動向をみても、奴隷廃止の流れを押しとどめることが困難だったことは明らかだった。むしろ彼らの抗議の意図は、少しでも奴隷廃止の実現を遅らせるとともに、奴隷解放に対する補償をしっかり勝ち取ることにあったと思われる。

実際、オランダの奴隷制廃止は同書簡の一五年後、一八六三年までずれ込んだ(ii)。そして現実に奴隷が自由の身になるまでには、さらに一〇年の期間が設けられた。しかも奴隷所有者たちは、奴隷解放にさいし、奴隷一人あたり三〇〇ギルダーの補償金を受け取ることに成功した。たとえば、ヒュルヒャーとともに奴隷制廃止に真っ向から反対したヘイスベルト・フリスティアーン・ボス・レイツは、五つのプランテーションで六六五人の奴隷を

所有していた。また、アルブレヒト・フレデリック・インシンガーは、自身の会社で、それまで四〇ものプランテーション経営に関わり、資金提供を行っていた。そして彼らは、いずれもこの奴隷一人あたり三〇〇ギルダーの補償金の給付にあずかることができたのである。なお、補償金支出を伴う奴隷制廃止をオランダ政府が決断した背景に、当時の東インド経営の「成功」による財政状況の改善があった点については、大西（二〇一一）が指摘している。

そして奴隷解放後、スリナムのプランテーションは深刻な労働力不足に直面する。この問題に対応するため、中国、インド、そしてジャワ島など東インドから労働者が次々移入された。興味深いことに、東インド出身の契約労働者のうち、後に帰郷したのは二三％に過ぎず、残りは新規に起業したり、公共部門やサービス業に就くなどしてスリナムに定住した（Meel, 2015, 136–139）。今日のスリナム、特に首都パラマリボにおける多民族社会の存在は、このようなオランダ支配下における、西インド支配と東インド支配の交錯がもたらしたものだった。

ところで、奴隷問題に対応の遅かったアムステルダムであるが、女性たちが主導する奴隷廃止運動があったことは、特筆されてよい（Lucassen, 2021, 127–128）。

一八五八年、アムステルダムで「スリナムの福音宣教・奴隷廃止を進める女性委員会」が結成された。創設者はアンナ・アマリア・ベルヘンダール。父がデンマーク出身の船員で、みずからも世界各地に住んだ経験を持つルター派信徒である。彼女は作家、詩人、社会活動家として多方面で活躍したユニークな人物だが、イギリスの奴隷廃止運動に触発され、地元アムステルダムで反奴隷制を訴えたのである。活動には妹シャルロッテも協力し、中上層の女性たちをターゲットして進められた。

またこれとは別に、奴隷廃止を求める国王への女性の請願運動も一八五五年に行われ、アムステルダムの庶民

層の女性七三三名が署名している。

市長公邸として

ただ、ヘーレン運河五〇二番地の邸宅についてみれば、ヒュルヒャー家はすでに一八三〇年に同宅を第三者に売却していた。所有者はそれ以後転々とし、一八六九年以降、ファン・ローン家が同宅を所有し、居住する。このファン・ローン家は、やはりアムステルダムの由緒ある名家だったが、世代をさかのぼれば西インド会社やスリナム協会の理事を務めた人物（ヤン・ファン・ローン）がおり、奴隷貿易とつながった一族だった。

最終的にヘーレン運河五〇二番地が民間人の手を離れ、市長公邸として用いられるようになったのは、一九二七年七月のことである。

アムステルダム市に譲り渡したのはコルネリス・ヨハネス・カレル・ファン・アールスト。オランダ貿易会社の会長として東インド経営に深くかかわった人物である。こうしてヘーレン運河五〇二番地の邸宅は、西インド経営、東インド経営に関わる人物たちの所有を経て、ようやく公的管理のもとに置かれた。

なお、ヘーレン運河五〇二番地に住んだ初代の市長は、デ・フルフトである。彼は一九二一年から四一年まで、実に二〇年にわたりアムステルダム市長を務め、最後にドイツ占領当局によって職を追われている。そして戦後のアムステルダム市長は、労働党出身であったり、ユダヤ系の市長が多いこともあり、左派・リベラル系の気風が強く、その傾向は二一世紀の現在まで続いている。彼らの多くは植民地主義に批判的であり、その結果、ヘーレン運河五〇二番地の邸宅は、かつてと異なる志向の指導者層が住人として居住することとなった。

「記憶が残りつづける限り」

現在、ヘーレン運河五〇二番地の入り口には記念碑が置かれている。文面は以下の通り。

記憶が残りつづける限り、苦しみが無駄になることはない。

一六七二年に建てられたこの家では、一六九〇年まで、西インド会社の理事かつスリナム協会理事長のパウルス・ホーディンが居住し、執務した。彼はその職にあって、アフリカ人の人身売買に責任を負っている。アフリカ人たちは、奴隷とされ、カリブ海地域、すなわちかつての西インドに送られた。こんにち、わが町にはこのアフリカ人たちを祖先とするアムステルダム市民が多数存在する。

奴隷貿易と奴隷制度は、人道に対する犯罪である。

この説明板の文面は、市執行部により二〇〇四年八月二三日に作成された。その日は、ユネスコにより、奴隷貿易とその廃止を記憶する国際的な記念日として定められた日である。

二〇〇六年五月に行われたこの記念碑の除幕式に立ち会ったのが、時の市長、ユダヤ系のヨブ・コーヘンだった。

ハルセマ市長の謝罪

そして二〇二一年七月一日、アムステルダムのフェムケ・ハルセマ市長は、奴隷制を振り返る記念行事において、アムステルダムのかつての市執行部における奴隷貿易と奴隷制との関わりを明確に認め、謝罪を行った。彼

女は次のように述べる。「植民地の奴隷制と国際的な奴隷取引という商業システムにおいて、アムステルダムの市執行部が積極的に関与したことについて、私は〔現在の〕市執行部の名において、謝罪します」。ハルセマ市長は、この謝罪に先立って公表された調査報告を踏まえつつ、「ホラント州は奴隷貿易と奴隷の搾取において重要な役割を演じた」こと、「アムステルダムでは誰もが植民地スリナムから利益を得ていた」こと、当時の経済成長のかなりの部分が奴隷制によってえられたものであったことを指摘した。

奴隷貿易や奴隷制に関わったオランダの有力都市の中で、このように過去を直視し、市長が明確な謝罪を行ったのは初めてのことである。この彼女の先駆的な行為は、ちょうどその一世紀半前、やはりアムステルダムでアンナ・アマリア姉妹をはじめとする女性たちが、奴隷制廃止に向けて勇気ある行動をとったことを想い起こさせる。アンナ・アマリアたちの運動は、その数年後、オランダにおける奴隷制廃止へと結実した。そして今回のハルセマ市長の謝罪演説は、翌二〇二二年における、冒頭で紹介したリュテ首相の公式謝罪へとつながっていったのではないか。いずれも女性たちの先駆的な行動が、男性の権力者たちを動かしていったといえる。

なお彼女は、アムステルダムの街の様子と奴隷制との関連についても触れている。「この歴史は、私たちの町に遺産を残しています。その遺産は、歴史ある運河地区や豊かな芸術のなかに、はっきり見て取ることができます」という。この「運河地区」の「遺産」のなかに、まさに市長自らが日々の生活を送る現在の市長公邸、すなわち一七世紀末以来の奴隷貿易・奴隷制の拠点となってきたヘーレン運河五〇二番地の邸宅が含まれているであろうことは、いうまでもない。

参考文献

Antunes, Catia, Erik Odegard and Joris van den Tol, 2015, "The Networks of Dutch Brazil: Rise, Entanglement and Fall of a Colonial Dream," in Catia Antunes and Jos Gommans eds., *Exploring the Dutch Empire: Agents, Networks and Institutions, 1600–2000*, London: Bloomsbury, pp. 77–94.

Balai, Leo, 2013, *Geschiedenis van de Amsterdamse slavenhandel*. Zutphen: Walburg Pers.

Balai, Leo, 2021, *Herengracht 502: Slavenhandel, geweld en hebzucht 1672–1927*, Edam: LM Publishers.

Blakely, Allison, 2001, *Blacks in the Dutch World: The Evolution of Racial Imagery in a Modern Society*, Indiana University Press.

den Heijer, Henk, 2015. "Institutional Interaction on the Gold Coast: African and Dutch Institutional Cooperation in Elmina, 1600–1800," in Catia Antunes and Jos Gommans eds., *Exploring the Dutch Empire: Agents, Networks and Institutions, 1600–2000*, London: Bloomsbury, pp. 203–225.

Lucassen, Jan and Leo Lucassen, 2021, *Migratie als DNA van Amsterdam 1550–2021*, Amsterdam/ Antwerpen: Atlas Contact.

Meel, Peter, 2015, "Paramaribo: Myriad Connections, Multiple Identifications," in Catia Antunes and Jos Gommans eds., *Exploring the Dutch Empire*, pp. 131–164.

Oostindie, Gert, 2015, "Curaçao: Insular Nationalism vis-à-vis Dutch（Post）Colonialism," in *Catia Antunes and Jos Gommans eds., Exploring the Dutch Empire*, pp. 245–266.

van Alphen, Marc, Jan Hoffenaar, Alan Lemmers and Christiaan van der Spek, 2021, *Military Power and the Dutch Republic: War, Trade and the Balance of Power in Europe, 1648–1813*, Leiden: Leiden University Press.

大西吉之、二〇一一、「帝国の支配構造：オランダ領西インド植民地の奴隷制廃止と国際関係」佐藤幸男編『国際政治モノ語り：グローバル政治経済学入門』法律文化社、三八‐五〇ページ。

大峰真理、二〇二二、「一七世紀フランスの植民会社と小アンティル諸島」岩波講座世界歴史、第一四巻、二三九‐二五八ページ。

桜田美津夫、二〇一七、『物語　オランダの歴史：大航海時代から「寛容」国家の現代まで』中公新書。

佐藤弘幸、二〇一九、『図説オランダの歴史　改訂新版』河出書房新社。
関哲行、二〇二二、「近世スペインのユダヤ人とコンベルソ：グローバル・ネットワークを含めて」岩波講座世界歴史、第一一巻、一八三-二〇〇ページ。
デ・ソウザ、ルシオ、岡美穂子、二〇二二、「奴隷たちの世界史」岩波講座世界歴史、第一一巻、一三一-一六〇ページ。
安村直己、二〇二二、「南北アメリカ大陸から見た世界史」『南北アメリカ大陸　～一七世紀』岩波講座世界歴史、第一四巻、三-六五ページ。
吉田信、二〇一九、「スリナムの奴隷廃止記念碑をめぐって――スリナムに奴隷博物館がないのはどうして?」『月刊みんぱく』第四三巻第九号、八-九ページ。

（i）なお大峰（二〇二二）は、フランスのカリブ海における植民地支配、特に一七世紀の奴隷貿易・奴隷制の展開における、アムステルダム出身者の果たした役割に注目している。小アンティル諸島のフランス領グアドループ島では、一六三五年に設立された特権会社たるアメリカ諸島会社が植民と開墾を開始したが、この会社のもとでサトウキビ農園を開設し、サトウキビ栽培と粗糖生産を大規模に進めていったのが、アムステルダム出身の商人、ダニエル・トレセルとその一族である。しかもアメリカ諸島会社は、サトウキビ栽培に必要な労働力を確保するため、ダニエル・トレセルの息子サミュエル・トレセルを、黒人奴隷調達を専門に行う顧問職に任命している。会社としてトレセル家を全面的に支援し、奴隷貿易・奴隷使役を展開したのである。さらに一七世紀半ば、粗糖生産地として名高いオランダ領ブラジルをポルトガルに奪還され、同地を脱出したオランダ系住民の一部がグアドループ島に到達するが、彼らの持つプランテーション運用のノウハウは、島のサトウキビ栽培と加工に活用された。ケルン生まれでアムステルダムを経由し、ブラジル・ペルナンブコを経てグアドループ島に移ったサミュエル・ファン・ガンポエルが代表格である。大峰は、これら一七世紀の小アンティル諸島における経験が、のちのフランスのカリブ海におけるプランテーション型植民地経営、すなわち一八世紀のサン＝ドマング（後のハイチ）における大規模なサトウキビ栽培と加工生産体制の急速な発展の背景にあるのではないか、と論じている。

（ii）スリナムにおける奴隷廃止記念碑については、吉田信の解説（吉田、二〇一九）を参照。